主図版①「永元元年十一月八日豫、章宜春完城旦梁東」

「秦漢時代の瓦当と磚文」

⑮「刑徒磚」　漢時代

補助図版

①

②

③

清末民国期に河南省から出土した磚である。清末の軍人であり、金石学に秀でた端方が、二百件あまりのこの種の磚を収集した。これらの比較的文字の残る百件余りを『陶齋蔵磚記』に収録し、拓本を発表した。これが日本でも古代の金石文字の好きな書家の眼に止まり、その素朴、単純、明快な線質や文字構成に魅了され、創作に取り入れだした。恐らく粘土がまだ柔らかいときにヘラなどで、直接刻されたのであろうか。草卒であり、天真爛漫な趣であり、補助図版②の「蘇松死」の三文字には、眼を奪われる。この磚の内容は、何年に誰が亡くなったことのみを記す、簡単な墓誌銘である。当時の罪人であることを示す刑名が記されている。そのために「刑徒磚」「刑徒墓銘」「刑徒墓葬磚」などと称された。紀年から後漢時代の永初元年(107)から永寧二年(121)ころの作とされる。新中国成立後も河南省や陝西省から同種の刑徒磚が出土している。

伊藤滋（書斎名・木鶏室）

書道芸術院
平成の群像（2018）

木村貴衣

「前衛書と私」

私が書の道に入ったきっかけは、職場のサークルです。上司より仕事に役立つからとの勧めで入会することに決めました。その時ご指導いただいたのが板垣龍鶴先生でした。

初めは週一度のお稽古日に半紙をひたすら書き続けたものです。数年のご指導の後、展覧会への出品を強く勧められたのが初めての前衛書との出会いです。

ああでもない、こうでもないと無我夢中で書きまくりました。それでも出来上がった作品を添削頂くため持参すると、「堅い。文字性が残り過ぎ。線が甘い。余白が響いていない」等の指摘が盛り沢山でした。添削の回数が増すに従い、先生のご指導の中から少しずつ気付いたことは、「造形は、ただ綺麗なだけでは弱い、まず風景がなければ人の心を揺さぶる魅力が生じないのではないか。そして無意識のうちに体が動き、呼吸とリズムが伴えば自然と根幹である線も良くなるのでは」と。そして書は、胆力で書くことが望ましいとも悟りました。

今もまだまだ空回りが多く、毎回同じことの失敗ばかりですが、枚数を重ね努力を惜しまず自分なりの作品を目指し積み重ねて行くしかないと思っております。

板垣龍鶴先生には書の基本と前衛書との出会いなど本当に人間味あふれるご教示を頂きました。

その後、千葉蒼玄先生にご指導いただいております。先生は書道史・書論を交えながら古典臨書の大切さを厳しく説きつつ個性も尊重して下さいます。好きなものを自由に伸び伸びと楽しく書かせて頂いております。

年齢を重ねた今、両先生のご指導等に深く感謝しつつ、肩を張らずに好きな部門にも試行錯誤しながらも挑戦し、少しでも極めていけたらと願っております。

第68回書道芸術院展出品作

木村貴衣書

書のひろば

理事長　辻元大雲

第71回書道芸術院展盛会に

2月4日陳列作業を多くの協力者、業者のご努力をいただき夕刻までに完了した。今回展から作品サイズが一回り大きくなった関係で展示スペースに不安があったが田村鄭雲陳列部長の周到な準備で予定通り展示できた。

午後3時半からの記者会見では20社余りにご出席いただき、下谷洋子実行委員長、辻元運営委員長から展覧会概要の説明を行った。外部評論家の眼は九州国立博物館島谷弘幸館長、書道芸術誌でお世話になっている木鶏室の伊藤滋両先生にお願いして計10点の作品を選考していただいた。

6日から11日までの会期中、6日、9日、11日の3回作品解説会を会場にて開催、6・9日は主に無鑑査、一般公募作品を中心に、各部審査正副主任が個別に作品批評を交え行った。11日は第1室にて主要幹部作品や大作などを中心に行った。

10日には午後から第69回全国学生書道展、第71回展表彰式、祝賀会が帝国ホテル富士の間、孔雀の間を会場に盛大に開催された。学生展表彰式は受賞者はもとよりご家族・指導者などが大勢詰め掛け会場は溢れんばかりであった。一般展の表彰式も同様で盛大に挙行され、受賞者にはよい記念となったと思う。祝賀会は500名あまりの参加者で、今回招待者は評論家、ジャーナリストに限ったため30名余と少なかったが全国からの出席者で賑わった。広田勝己毎日新聞社取締役、陳　諍中国大使館公使参事官、星　弘道全日本書道連盟理事長、麻生泰久書道評論家からご祝辞をいただき、西村修一毎日書道会専務理事のご発声で乾杯、賑やかに開宴した。各受賞者の紹介なども例年通り行われ、盛会であった。

会期中の入場者は約8000名と昨年より増加した。11日午後からの撤回作業、翌日の搬出まで陳列部、総務部などのご努力で無事完了した。感謝申し上げたい。

作品解説会風景

現代女流書100人展も盛況

院展と同会期となった現代女流書100人展は、セントラルミュージアム銀座、新進展も2階会場にて開催された。本院からは下谷洋子運営委員、香川倫子顧問など15名が出品した。

初日6日夕刻から祝賀懇親会が開催され華やかな雰囲気で盛会であった。9日には皇室から秋篠宮眞子様がご来場になり2時間余り鑑賞された。ご先導は兼岡白葉運営委員が務められた。会場内外は報道関係者で溢れテレビでも放映され時の人の人気ぶりが感じられた。

上野三碑「世界の記憶」登録記念日中書道展開幕

日中平和友好条約締結40周年記念事業として群馬県・高崎市・上野三碑世界記憶登録推進協議会・上海市人民政府の主催で開催され、23日開幕式が挙行された。

＊会期　平成30年2月23日～28日
＊会場　高崎シティギャラリー
＊主要出品者（敬称略）
日本側　星　弘道、田中節山、清水透石、吉澤鐵之、辻元大雲、下谷洋子、鬼頭墨峻、室井玄聳、石原太流、杭迫柏樹、石川芳雲（以上全国代表）
群馬県関係出品者　西林乗宣、金井如水、新井京華ほか12名
＊会場には多胡碑記念館収蔵の上野三碑をテーマとした名家による臨書作品が多数展示される予定。
中国側出品者
蘇士澍中書協主席ほか10名、上海市出品者15名、ほか在日中国書法家
＊中国会場（上海呉昌碩記念館）
＊会期　30年4月中
上野三碑見学と共にご高覧を。

第70回毎日書道展運営委員会

2月1・2日第70回記念毎日書道展の運営大綱、主要人事が決定した。今回は70回記念展として当番審査員および入賞枠の増加が行われる。

本院関係人事は左記の通り。（除既報）

・会員賞選考委員　辻元大雲、下谷洋子（以上理事監事）、小竹石雲（近詩）、小伏小扇（大字）、板垣洞仙（前衛）
・当番審査員　竹本龍汀（漢Ⅰ）、種谷萬城（漢Ⅱ）、田子白嶺（かⅠ）、平川峰子（かⅡ）、金木和子（近詩）、浜田堂光（同）、広瀬舟雲（同）、川島舟錦（大字）、前田龍雲（同）、後藤大峰（刻字）、太田蓮紅（前衛）、金井如水（同）、津田海仙（同）、真下京子（同）、山口仙草（同）
・総務副部長　三森慧香（前衛）
・陳列副部長　田村鄭雲（近詩）
・鑑別審査担当主任　木村東舟（かな）
・入落担当主任　佐久間幸扇（近詩）

小野寺逢仙先生ご逝去

本院参与会員、毎日書道展参与会員の小野寺逢仙先生が2月15日ご逝去された。享年95。2月20日気仙沼でのご葬儀に際し辻元理事長が参列、弔辞を拝読させていただいた。ご冥福をお祈りします。

漢字(六)

小伏小扇

甲骨文の書表現(六)

甲骨文で書作する時の自分のスタイルが見えてきました。

①は形態の現代化

②は形態の心象化

③は余白の美が充実する篆刻の方寸的な動きのハーモニー

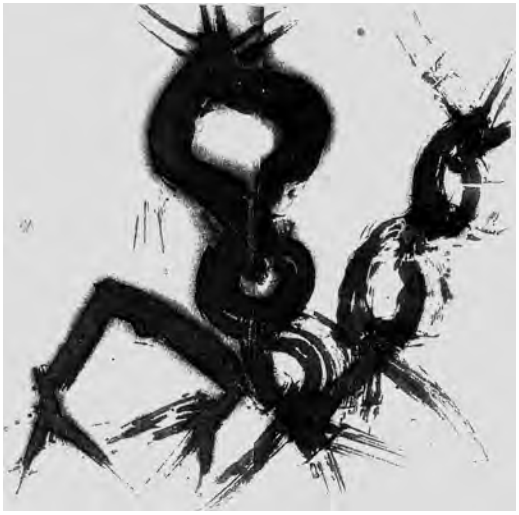
の3点にまとめられると思います。

これからは甲骨文ばかりでなく、金文や行書体でも、静かな姿の中に現代を語るものを目ざし、夢を追いつづけてまいります。

また大字書の場合は特に、落款印の果たす役割も、たいへん大きいものと感じます。今後は自刻印を各作品ごとに用意するのが夢です。

「絲竹」は楽器や音楽を表わす意味。絲は弦楽器、竹は管楽器で管弦であり、絲・竹の合体で音色を表わす。この甲骨文の結合は、形でまろやかなメロディを外部に発声する。

(2015書作品年鑑)



小伏小扇書

「絲竹」

21世紀の書

―私の主張―

現代詩文書(六)

西岡雨瑤

「〝先人の書〟に学びたい」

北の詩人をさがし出してみようと、北の風土をこよなく愛した詩人と向き合うには、いい季節だ。北の大地に育った師匠雨城先生、十勝の大平原から誕生し、白の世界を書き続けている。「黒の中の白の中の…」に代表される先師の跡を追って、書き続ける。美しい白に。書の黒は白とのコントラスト。

他の芸術のコントラストとは根本的に異なる。書は対立軸をもたない。「調和」の美である。〝呼吸〟が自然であることも、若い時、ヨガの総師、沖正弘先生に学んだ。呼吸のリズムを応用して、目的とする変化を自分のこころと体に与える。これも書の大切な要素としている。

一点一画に「再生の白」を追うのに似ている。ここに提示した私の作品は、北の詩人である。師匠から学んだことを脳裡に、料紙は大宇宙であり、文字の配置・線の表現を、最大限に生かし、最終は〝線が生命〟と求めた。「北国からの招待状」がそれ。

一期一会―自己をそこに定着させる。私はいつも詩情を大切にする。その心は、書を書く人の心境が大きく影響する。書を習うことは、自己を鍛えることであり、生と書に、私の今進むべき方向を把握して歩む。美しい「書の華」が咲くことを念じながら。これで全拙稿の幕を閉じよう。

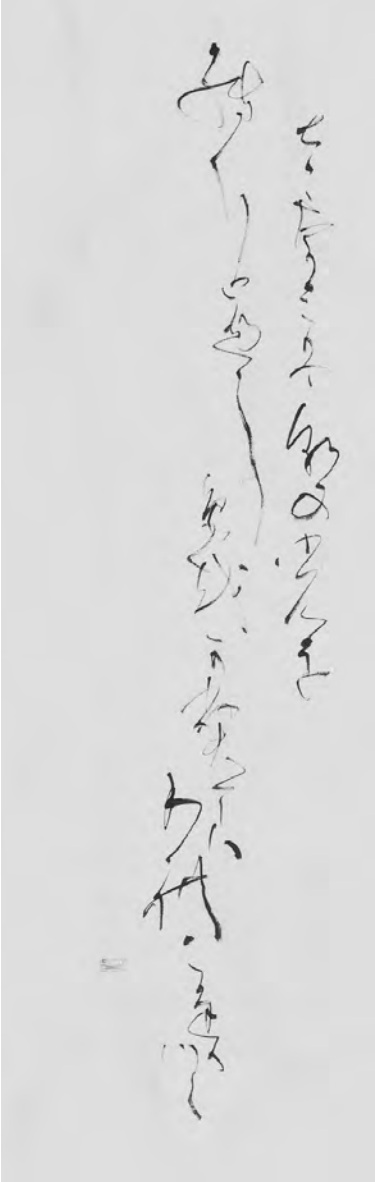
第70回記念書道芸術院展出品作　　西岡雨瑤書

第49回 現代女流書100人展

同時開催＝現代女流書新進作家展（第69回毎日書道展会員賞受賞作家）

会期＝平成30年2月6日(火)～11日(日・祝)
会場＝セントラルミュージアム銀座
フェニックスホール
主催＝毎日新聞社　後援＝(一財)毎日書道会

〈朝の光〉



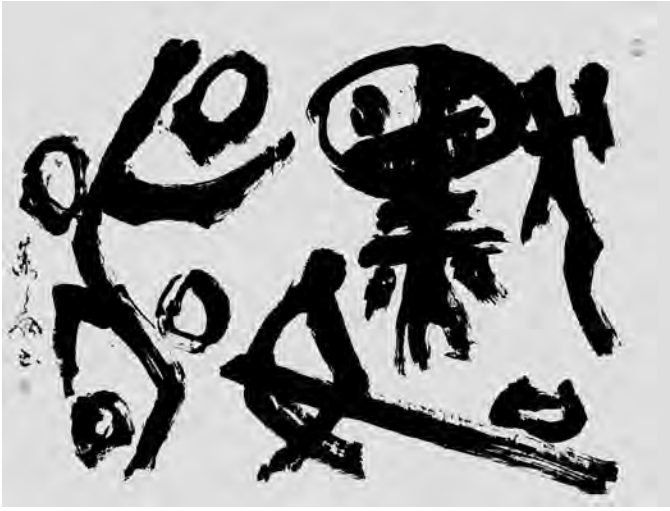
下谷洋子

184×60㎝

〈洋〉

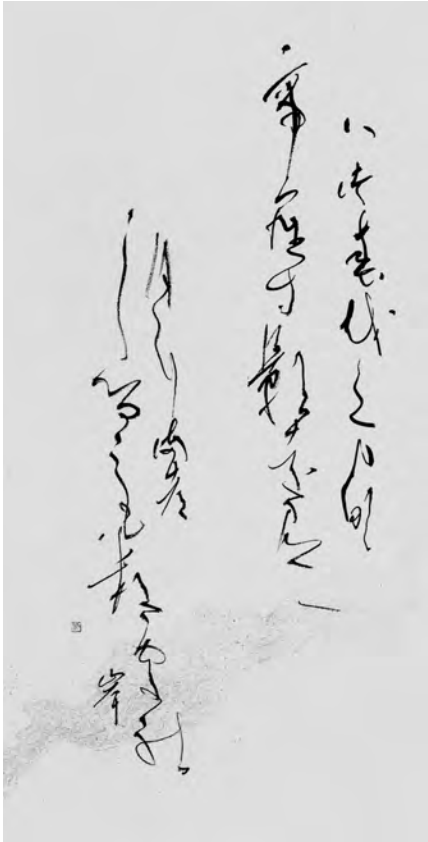
香川倫子

89×80㎝



佐藤莱扇

〈黙如雷〉　95×125㎝



〈初春〉

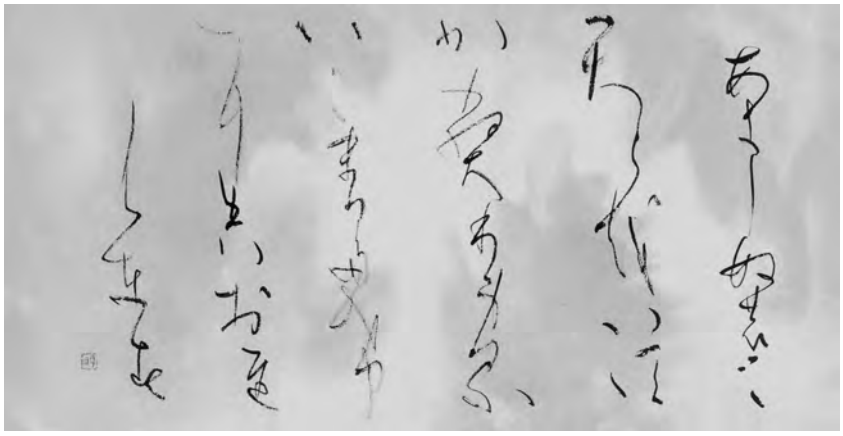
大辻多希子

137×70㎝

〈春〉

橋本玉扇

172×85㎝



石井明子

〈あきしぬの〉

69×136㎝

〈原コウ子句〉

町山美扇

177×70㎝

〈風〉

山田梓江

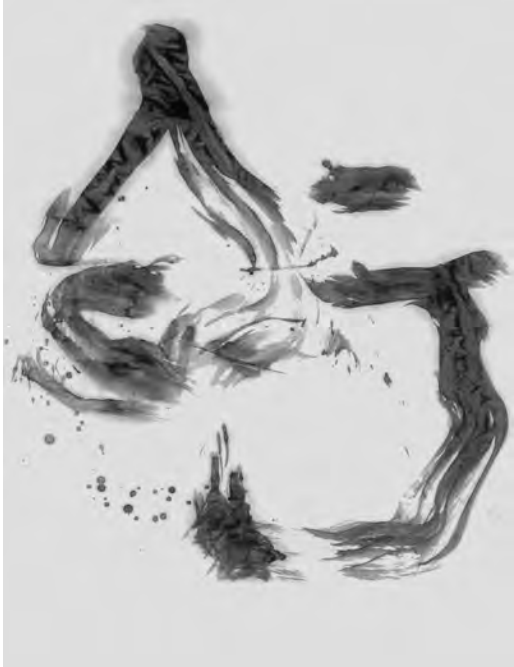
32×96(上)／64×96(下)㎝

〈うららか〉

倉林紅瑤

182×79㎝

〈白雲〉



飯田春香

137×106㎝

〈寿〉

小伏小扇

120×120㎝

〈立像〉

三森慧香

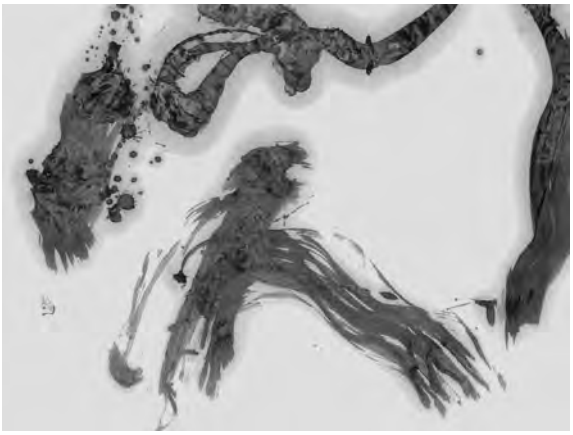
180×86㎝

平岡千香子

〈燈々代々（命のリレー）〉 103×133㎝

新進作家展

〈閃〉



青柳明華

89×119㎝

〈探春〉

柳町祥香

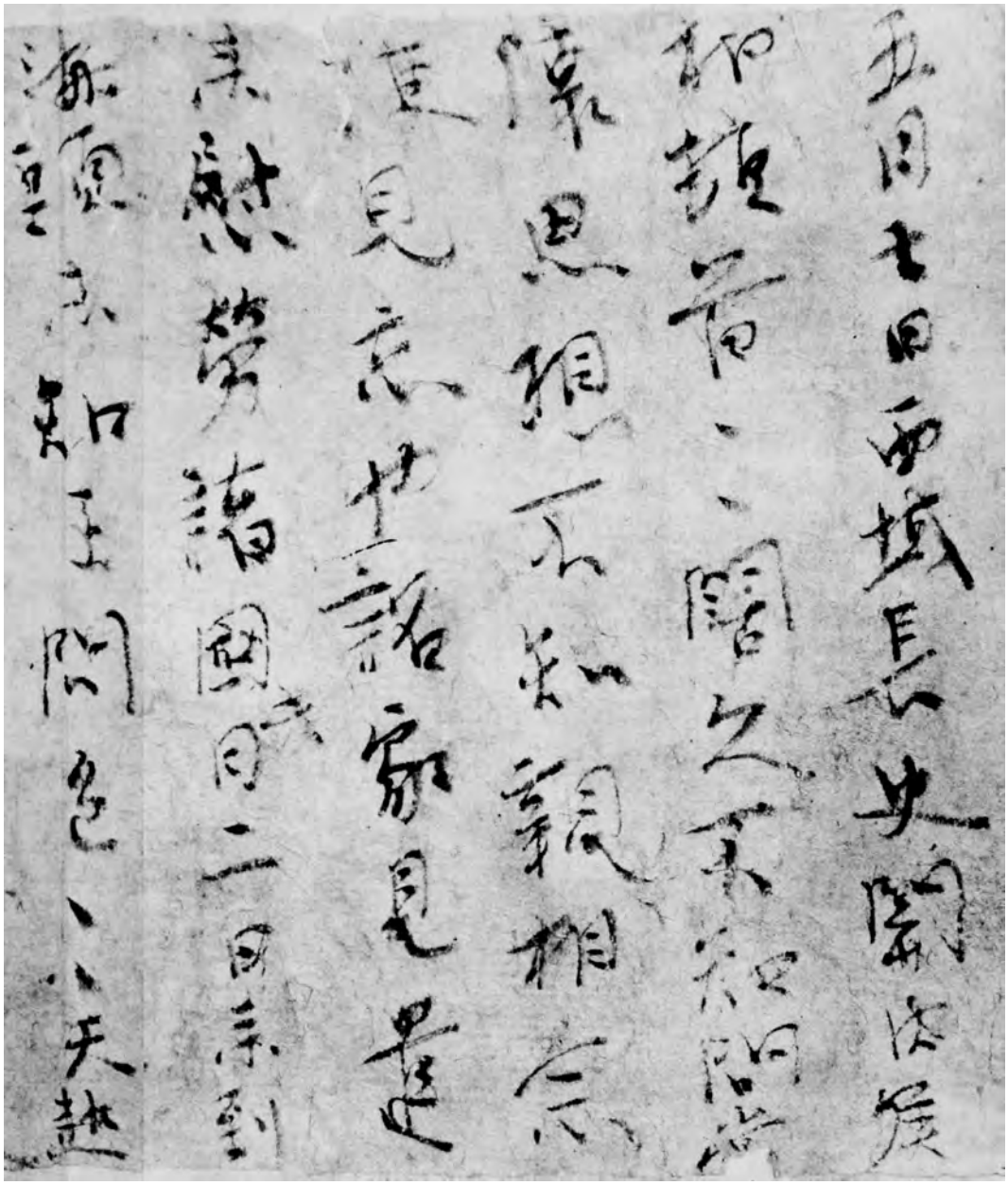
121×91㎝

古典鑑賞 ㊹

李柏尺牘稿（李柏文書）東晋時代 ③

漢字研究部臨書課題 ＝（半紙普通判・縦使用）左記の法帖より何文字臨書してもよい。

特別研究部臨書課題 ＝（毎日展公募サイズ以内・縦横自由）当該古典の左記掲載部分以外も可。



（掲載図版97％縮小）

〈解説〉李柏尺牘稿は、1903年に楼蘭の遺跡から発見され、東晋初期の咸和3年（328）ごろのものと推定されている。王羲之の20歳ごろにあたる。この時代は、紙の使用が広まって書の技法も進み、尺牘（手紙）によって技法が競われるようになった。その中で、こうした真率な表現から、蘭亭序（353）のような行書の完成へと向かっていったのであろう。この楼蘭から発見された魏・晋間の簡牘や残紙の書は、楷書の発生と行書・草書の完成期にあたり、書体の変遷上においても重要な資料である。

（写真図版は、木鶏室の伊藤滋先生の提供です。）（編集部）

五月七日、西域長史關内侯
柏、頓首々々。闊久不知問。常
懐思想。不知親相念、
便見忘也。詔家見遣、
來慰勞諸國。此月二日來到
海頭。未知王問邑々天熱。

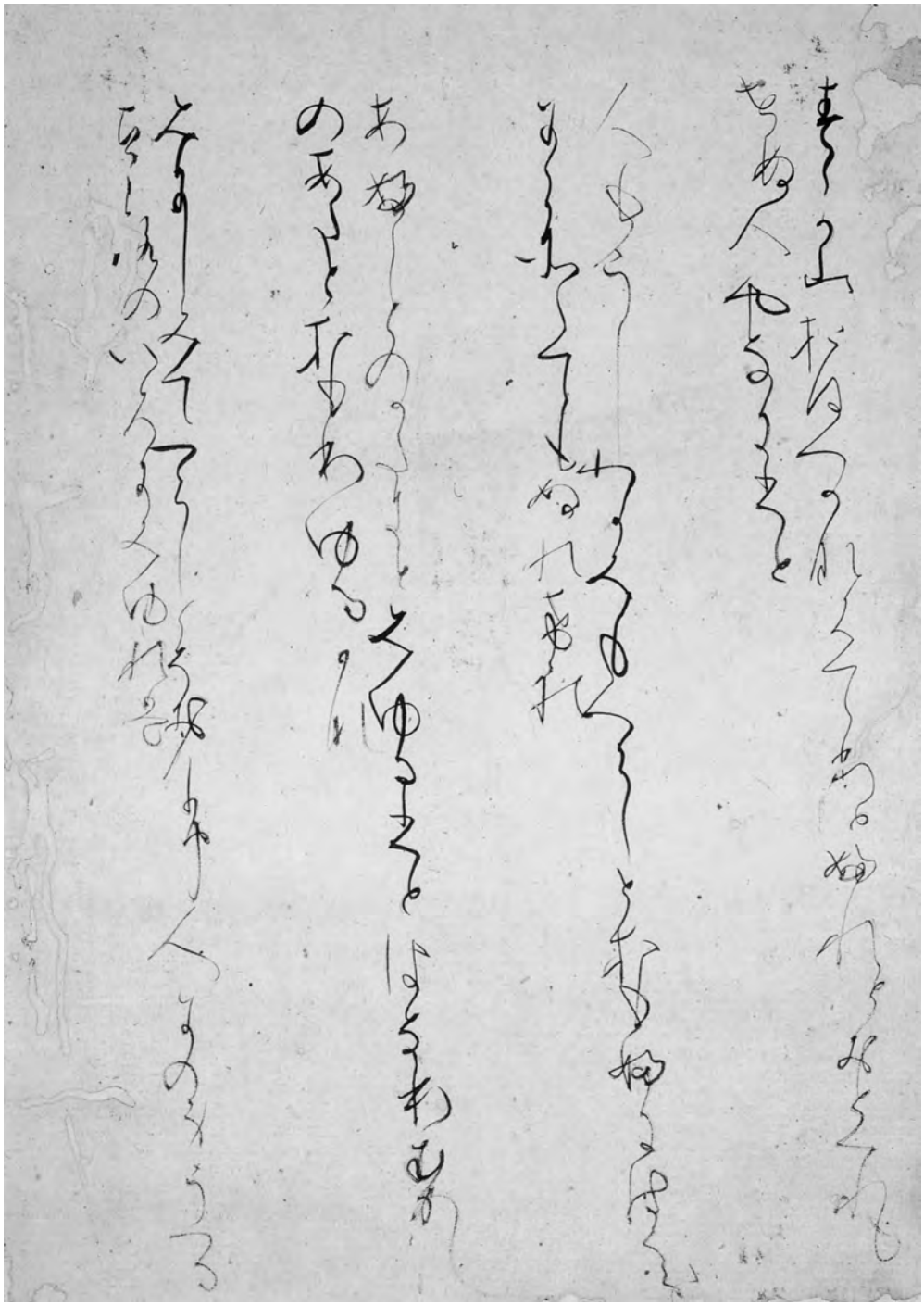
※落款を必ず入れる。署名、もしくは〇〇臨（押印のみも可）

針切（伝 藤原行成）③

かな研究部臨書課題 ＝（半紙普通判（料紙可）・縦長に使用）
別紙を裁断して貼付も可。半懐紙は半紙サイズに切って使用のこと。
左記の古筆の掲載部分より歌一首以上を書く。（全臨も可）

特別研究部臨書課題 ＝（毎日展公募サイズ以内・縦横自由）左記の掲載以外も可。

※落款を必ず入れる。署名、もしくは○○臨（押印のみも可）



（個人蔵）　※掲載図版は87%縮小

〈よみ〉
すゞか山おぼつかなくてほどふれ
どおとづれも
せぬ人やなにびと
人もうしわがみもつらしとおもふ
にはうら〳〵
にこそゝでもぬれけれ
あふことのかたきとみゆるひとは
なほむかし
のあだとおもほゆるかな
みにしみてつらしとぞおもふ人に
のみうつる
こゝろのいろにみゆれば

〈解説〉針切は、二種の私家集で、「源重之の子の僧の集」と「相模集」が書写されている。前者は約55首、「相模集」は約33首現存が確認されている。

今回掲載の「相模集」は詞書はないが、「なつ」「あき」「なげき」の部立の部分があり、歌一首一首の間を少しあけて空間を出している。時に1行目に下の句の一部も組み込んで、2行目の行末に大きな空間を出して明るさを一層引き立てている。文字も「僧の集」よりやや大きく、大らかに気分の赴くままに書き流していく自由さが見る者に近代的な流動美を感じさせる。（編集部）

（図版は「相模集」より）

※古筆は原寸（以上も可）で臨書しましょう。

漢字規定　初段以上【四月十五日締めきり】用紙　半紙普通判

最首翠風選書

雲深不知處　よみ（雲深くして処を知らず）

書体＝自由

習い方解説（六）

最首翠風

雲深不知處　（賈島）
（雲深くして処を知らず）

近年、帛書（絹に書かれた書）や残紙などの新発見もあり、木簡牘の書を手がける書家がふえています。

※牘は札・手紙の意―後に手紙を尺牘と称する。

2003年に発刊された「馬王堆帛書精選」―毎日新聞社（一財）毎日書道会刊全3巻―は秦・漢代の書で目に触れるものが殆ど石刻の書であった私達に、生き生きとした肉筆による日常の書を見せてくれました。碑刻の改まった書でなく、日常の書―兵書類や帳簿、養生に関するものなど人間の息吹を感じさせるものです。こうした「木簡」の類は―作者の心の奥に泌（潜）んでいる神秘な世界を揺り動かしてくれるものであり又創作の源泉へと私達をいざなってくれるもの―と大平山濤氏は書いています。

漢字規定　秀級以下　【四月十五日締めきり】　用紙　半紙普通判

千葉蒼玄選書

大象無形　よみ（大象無形）

書体＝楷書

習い方解説（六）

千葉蒼玄

大象無形（大象無形）　（老子）

最も大いなる現象は形のないものである。

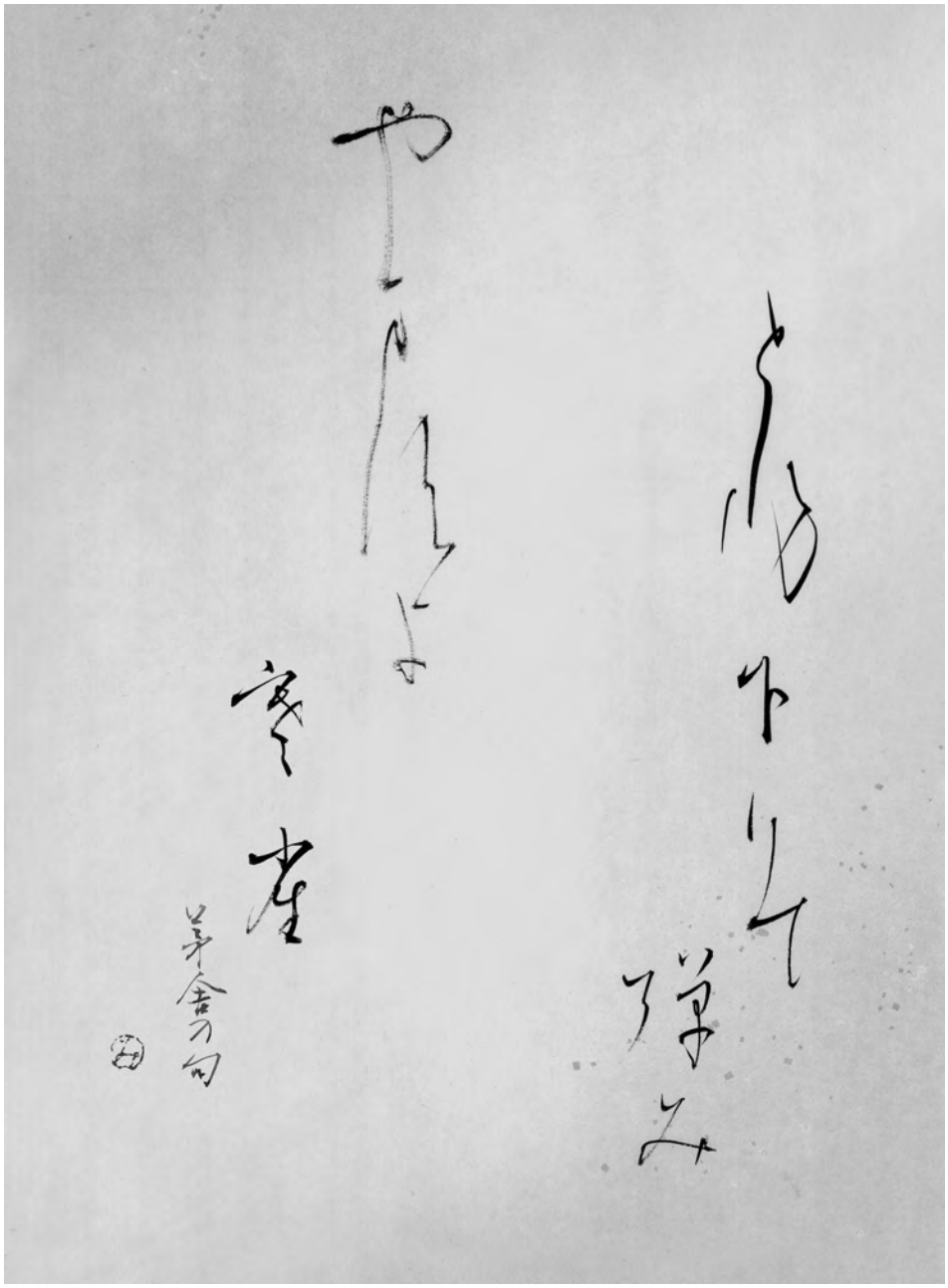
楷書は用筆の基本としているが、楷書を作品にするのはなかなか難しいことである。今回が最後になるので、今までの古典にない素朴で温かい楷書を目指して見たが、技巧的なものは案外と枚数を重ねればそれなりのものはできるが、なかなか古拙（素朴で衒いがない）というものの表現しにくいものである。

展覧会ではあまり見ない楷書であるが、狂草を得意とした川村驥山が、日本芸術院賞受賞した鍾繇風の楷書は名品と言われている。

鍾繇　薦季直表

かな規定　初段以上【四月十五日締めきり】用紙　半紙普通判（料紙可）

平川峰子選書



よみ方　とび(非)下りて弾みやま(万)ず(須)よ寒雀　茅舎の句

創作

習い方解説（六）

平川峰子

とび下りて弾みやまずよ寒雀

（川端茅舎）

屋根からでも飛び降りたのであろうか、地に下りても弾み止まないというのである。ころころと弾む様子がおかしくもあり、かわいくもある。雀をまるで毬のように描写している。

この俳句の漢字をかなや変体がなに置き換えて作品にする時、下りはおりかをりか迷うと思います。

かな使いについては古語辞典で確かめることを習慣にしてください。

まちがえやすいおとをの主なものは、次のようなものです。

織（お）り　降（お）ろす

折（を）り　居（を）り

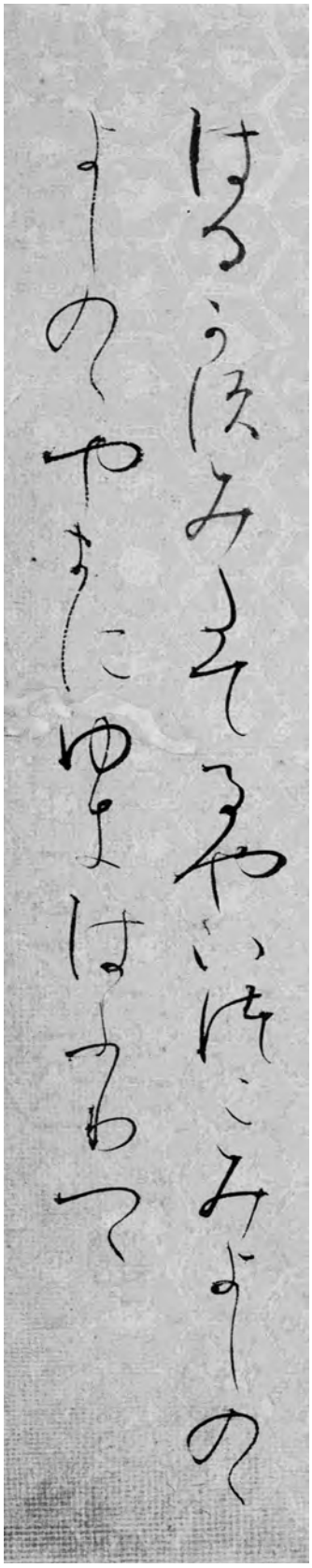
ずかづかというのも迷いますが、この句の中は全てずです。

弾（はず）み　やまず

雀（すずめ）

かな規定　秀級以下　【四月十五日締めきり】　用紙　半紙タテ1/2（料紙可）（たて32センチ・よこ12センチ）

掲載写真の和歌を臨書する。または部分（2字以上の連綿）を臨書する。

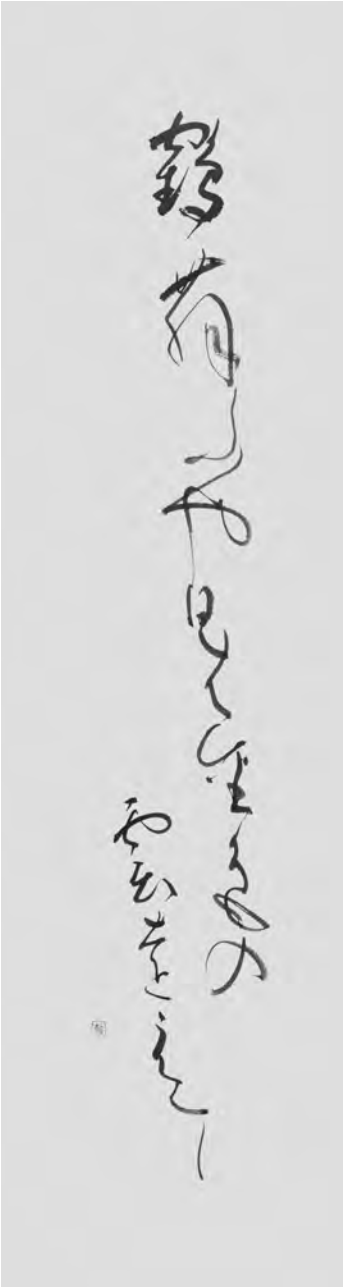


粘葉本和漢朗詠集
（掲載写真拡大111％）

よみ方　はるが(可)す(須)みた(多)てるやいづ(徒)こみよしのゝ
よしのゝやまにゆき(支)はふり(利)つゝ

かな条幅規定　【四月十五日締めきり】　用紙　小画仙紙半切（料紙可）

庄司紅邨選書



よみ方　鶴舞ふや日は(者)金色の雲を(遠)えて

創作

習い方解説 (三)

庄司紅邨

鶴舞ふや日は金色の雲を得て
（杉田久女）

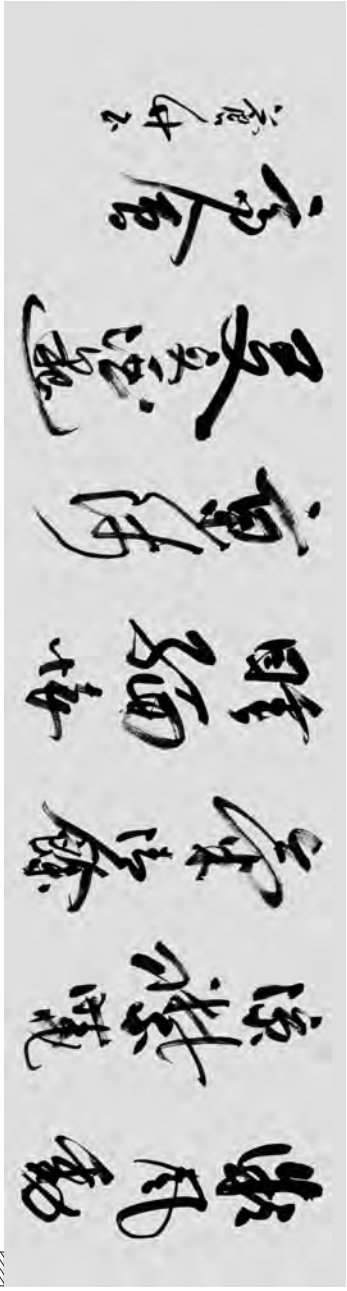
端正で美しい「鶴」が飛翔している。その姿は日の光をあび、輝いているようである。その光景への賞讃。情景と色彩感覚が見事にマッチした句である。

一瞬をとらえた表現を大事にし、変体がなの使用を控えめにしました。「鶴」「舞」の漢字の流れをかな作品らしく表現したいですが、書体の選択が難しいです。後半二行目で墨継ぎですが、一行に寄り添いながら終句でまとめましょう。

※タテ形式に限る

漢字条幅規定　初段以上【四月十五日締めきり】　用紙　小画仙紙半切

名越蒼竹選書



微風動涼襟　暁気清余睡　緬懐京師友　文酒邈高会
（微風は涼しき襟に動き、暁の気は余りの睡りに清し。緬に京師の友を懐う。文と酒もて邈に高会せるならん。）（歐陽修）

書体＝自由

出品券貼付位置

漢字条幅規定　秀級以下【四月十五日締めきり】　用紙　小画仙紙半切

大平邑峰選書

読書萬巻始通神
（読書万巻始めて神に通ず）（宋・蘇軾）

書体＝自由

習い方解説（六）

名越蒼竹

今月は横形式で行草作品に挑戦しました。横形式では縦形式に比べて行間を広くとり、文字幅を変化を大きくして、扁平な字や左右へ伸ばした点画を上手に使って、各行の関連性を高め、横のつながりを意識するとよいでしょう。縦作品以上に文字のデフォルメ力が要求され、実力アップを図るには打ってつけの形式です

※2月号次号予告にて「タテ形式」と表記しましたが、**正しくは「ヨコ形式」です。**お詫びして訂正申し上げます。

習い方解説（六）

大平邑峰

担当最終月となりました。楷書は、学書において初歩的な書体と思われがちですが、実は難しいですね。作品化となればなおさらです。しかし、楷書も色々あり、時代を追って学ぶとその変遷にふれることができて興味が湧きます。今回は、唐・顔真卿の書風です。三大家、特に褚遂良の影響は大きいように思います。

ペン字規定【四月十五日締めきり】

北村白琉選書

上のそらでなしに、しっかり落ちついて、一時の感激や興奮を避け
楽しめるものは楽しみ、苦しまなければならないものは苦しんで生きて行きませう。

賢治の書簡より　白琉書

用紙＝はがきの大きさ（14.8×10㎝）、白色のもの、黒インク使用のこと

書体＝自由

習い方解説（六）

北村白琉

私の担当させていただく最後の月となりました。賢治が亡くなる10日前に書いた、花巻農学校時代の教え子に宛てた手紙の一部です。言葉の厳しさと暖かさが、賢治の生涯を貫く信念を言い尽くしているように思われます。

実用書としてペン字が用いられることが多い手紙、はがきの類では、相手に思いが通じるよう、心をこめて丁寧に書くことが一番大切だと思います。

書簡に限らずペン字を書く時に、粗雑に又自己流にならないように、毛筆を用いる時と同じような心構えで臨みたいものです。漢字もかなも日頃から古典と古筆の臨書により、基本となる形をしっかりと身につけ、品格のあるペン字が書けるようになることを目指したいと思います。

※落款（自分の名前）を必ず入れる。

今月のホープ作品各部総評

NO.681

漢字部　師範　浪川　秋花

のびやかな木簡風で、柔らかな渇筆が紙面にリズム感を漂わしている。落款の表情もマッチする。

◎漢字部総評　上級草書表現に字形の不安定なもの多し。古典臨書などで基本的な表現技術をしっかり身につけたい。（大雲評）

かな条幅部　師範　重村　恵月

かなの連綿は筆の浮沈によって、筆先がいかに使えるかが作品の良し悪しになる。用筆的確墨色も佳。

◎かな条幅部総評　変体がなの那・牟・禮、漢字の有など、通常よく用いる字に誤字多かった。思い込みは厳禁、確認を！（洋子評）

現代詩文書部　特選　奥村　美楓

羊毛筆を駆使して落ちついた深みのある線にベテランの域を感じる作品。前進前進また前進を。

◎現代詩文書部総評　墨色、構成、筆線など、何らかの工夫が見られる作品が増えてきた。（梓江評）

前衛書部　特選　地頭　浩美

曲線渇筆部と続く直線との融合で、緊張感を創成。作品に合う可憐な落款も大いに楽しめる。

◎前衛書部総評　個々に自意識の向上を感じ感動です。技術的意欲作も多く、魅了された。（慧香評）

漢字条幅部　師範　金井みどり

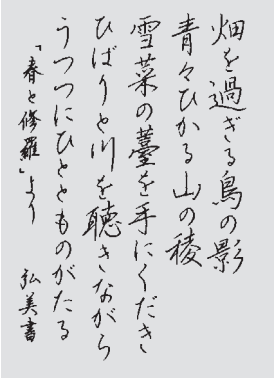
リズミカルで暢びやかな線が生き生きとした漢簡風の草隷。日頃の着実な臨書学習の成果が窺える。

◎漢字条幅部総評　上級は木簡風の作が多見。隷書の書法に未熟な作も多かった。日頃の臨書学習の有無に出来が左右する。（萬城評）

ペン字部　師範　浅野　弘美

力強く深い味わいの線質が魅力の作。懐の大きい字形で小さな紙面が迫力のあるものとなっている。

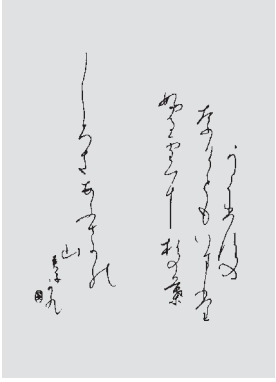
◎ペン字部総評　文字の大小の気配りができていないものが多々。バランス良く配字すると美しい余白が生まれると思う。（龍雲評）



かな部　師範　伊藤　英子

参考手本と真摯に向き合い、歌意に添う独自の呼吸を大切にしたゆったりとした運筆が美しい。

◎かな部総評　手本があれば完成度高く仕上る人は、独自性を目指し創作のこと。文言脱落、誤字等散見。提出前の確認を！（明子評）



今月の

特別研究部優秀作品（特選）

前衛書　（容洲社）　阿部邑里「心象」

阿部邑里書

180×60㎝

◆上部の瞬発力ある用筆から生まれる飛沫が美しい。また中央のたっぷりとった余白が明るく爽やかな雰囲気を漂わせる快作。（紅瑤評）

◆上部の鮮烈な表情が印象的な作。中央から下部への流れがややもたついた感あり。下部もっと整理を。（大雲評）

◆上下が響きあいつつ、飛沫が美しいリズムと余白を生み出している。下部の動き、まとめが見事で敬服。（和楓評）

◆円転の筆使いによる瞬時の飛沫と上部から下部への縦線で、より一増余白が生きている爽快な作。（東舟評）

臨書　（紅瑤）　金井みどり

「李柏尺牘稿」

金井みどり臨

180×60㎝

◆やや厚手の画仙紙にたっぷりした濃墨の艶ある線が光る。もっと大小の変化を大胆に表現したい。（大雲評）

◆濃墨でこの尺牘の特徴を良く捉え、筆の開閉・終筆処理が見事。3行のバランス良く、明快な作品。（和楓評）

◆李柏尺牘稿を濃墨で六尺に3行書き。大胆な筆致で豪快。墨の潤渇もよく表現されて見応えのある作品。（東舟評）

◆原帖の雄大かつ自在な書の特徴を的確に捉えた臨書作。濃墨による潤渇の線条が冴え、心地よいリズムを生んでいる。（紅瑤評）

現代詩文書　（うるいど）　国吉真雲

国吉真雲書

60×178㎝

「五輪峠」

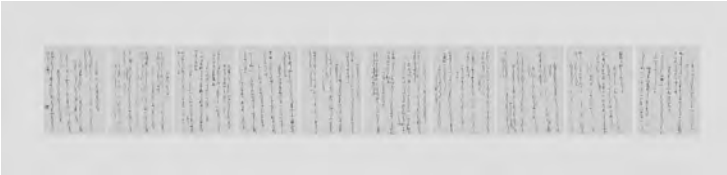
◆濃墨でじっくりと書き、ブロックの中に淡々とした思いが出ている。後半と落款に更に一考を望む。（和楓評）

◆宮澤賢治の詩を淡々と、集団構成によるリズム感ある紙面で展開する。詩情の流れを感じさせて妙。（大雲評）

◆字粒のほぼ揃ったブロック形式の構成で余白を考慮した詩。紙面から何か問われているかのよう。（東舟評）

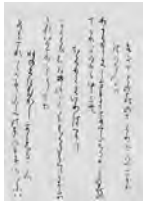
◆淡々と書き進める中に構成・潤渇の変化などを巧妙に盛り込み、上品な横作品に仕上った。（紅瑤評）

臨書（書泉）都丸 みどり「針切」



都丸 みどり 臨　　44×180㎝

部分拡大



◆筆鋒を利かせたシャープな線質が快い。自由闊達な連綿の流れを良く捉えている。熱意に感動。（東舟評）

◆鋭い筆致の特質をよく観察し、潤渇の変化も自然で見事。細部にやや甘さもあり、更に努力を。（大雲評）

◆原帖を良く捉え、墨継ぎも美しい流れとなり、筆端の爽やかさがある。日頃の研鑽に頭が下がる。（和楓評）

◆丹念に細部まで古筆の特徴を捉え、筆の毛先を巧みに使い、細く鋭い筆線は歯切れのよい爽やかさを感じさせる。（紅瑤評）

臨書（大雲）江本興舟「李柏尺牘稿」

江本興舟臨

148×70㎝

◆全紙に2行で大胆に表現、原帖の大らかな動きと豊かな表現をよく捉えている。率直な表現を買う。（大雲評）

◆一字の中にうねりもあり、堂々とした2行。2行目の渇筆が動きとなり、作者の想いが込められた書。（和楓評）

◆重厚感ある濃墨の太書。右上りの特徴をよく捉えて全紙に堂々と実力を発揮している。（東舟評）

◆原帖の重厚で動的な表情をよく捉え、大胆な筆致で躍動感にあふれる臨書作。力強く自在な運筆が見事。（紅瑤評）

漢字（恵雅）板橋雅邦「岑参詩」

板橋雅邦書

180×60㎝

◆濃墨のねばりを活かし、柔毫長鋒筆による太細の変化がリズムを奏でる。懐抱の広さがあれば尚。（大雲評）

◆細い線の動き、連綿が見事な作品。墨の入ったところがアクセントとなり行と行の響きが美しく明快。（和楓評）

◆交互に交じり合う太細の筆線がリズミカルで楽しい。変化に富んだ用筆に魅力を感じる。（東舟評）

◆長鋒筆の弾力を十分に発揮し、よく鍛錬された細線が心地よいリズムを生んでいる。紙面明るく爽快な作。（紅瑤評）

創作の部（54点）
漢字 — 7点
かな — 3点
現代 — 20点
篆刻 — 0点
前衛 — 24点

臨書の部（27点）
漢字 — 24点
かな — 3点

総出品点数 81点

〈特選候補者〉

（創作の部）

「漢字」
八街 小川 白柳
大拙 畠中 成山
宗苑 茂木 絢水

「かな」
游水 荒川 空華
如月 治田 芳江

「現代詩」
うる 菅原 房江
もく 森田 藤谷
麗澤 秋山 之扇
もく 西川 藤象
恵雅 板橋 恵泉

「前衛」
白珠 工藤 史音
青蓮 伊藤 有津
光風 千葉 光泉
玉州 遠藤 和香
秀恵 阿部 雅悠
松風 西條 松雲

（臨書の部）

「漢字」
千葉 猪又 理扇
紅瑤 小暮 千晶
樹原 紺野 遊山
大雲 森地 桂鶴

漢字研究部
（李柏尺牘稿）

選評　稲垣小燕

今月のホープ作品

永井鳳雪

漢字研究部　特選　永井　鳳雪

運筆巧みでリズミカルな秀作です。変化に富んだ字形の特徴をよく捉えバランスよくまとまりセンスの良い作品です。観察力の深さに臨書の意味を踏まえての学書の姿勢が伝わってきます。

◎漢字研究部総評

李柏尺牘稿（李柏文書）は書簡の草稿として書かれたもので、整斉されたものではなく意の赴くままに自由闊達に書かれていて字形は難解な箇書が多々あります。且つ用筆は変化に富んでいます。それ故にじっくり観察して書きこむことが大事です。臨書するにあたっては、見えたままを写し書くのではなく文字を確認し、辞書で形態を調べることが必須です。文字を正確に捉えることが基本です。今回は誤字が非常に多く見られました。丁寧な臨書を心がけたいものです。

美陽紅　翠　岳　栖
梢光霞　舟　香

光白祥松麗幸
有苑扇華流泉

春有春惠明久春
子津子　日　美夏峰

かな研究部
（針切）

選評　庄司紅邨

今月のホープ作品

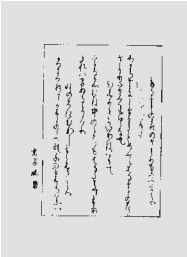
宇田川　春華

かな研究部　特選　宇田川春華

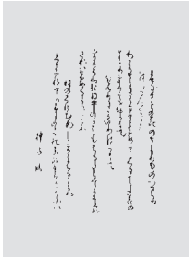
針切特有の細くて鋭い線質をよくとらえ、筆先にまで繊細な部分を込めて書きました。潤渇の表現も美しく、見事な作品です。

◎かな研究部総評

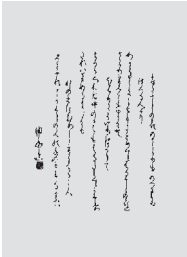
歌一首の行の中で、墨量の変化を生かしてコントラストを出し、表現している古筆が針切の大きな特徴です。渇筆部分も注意して運筆して下さい。



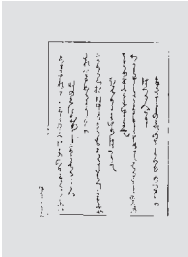
千恵京
峰子子



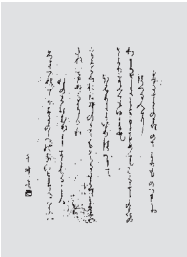
真明律日
紀夏子

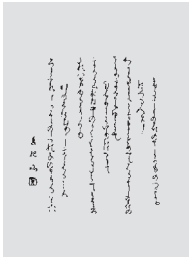


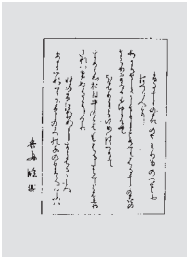
香美絢
舟雪水

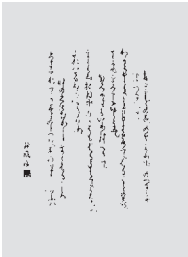


鈴洋佑
風子子









かな研究部成績表

特選

正華泉　竜Ａ Ｉ　八戸　大雲　正華　白珠

鵜澤　今村　伊藤　市川　磯貝　石川　相内知　沙津子　清耀　紫泉　寿子　貴名泉

竜泉　たかはし　やまかき　千葉　澄春　誠和　石習　八松　玉田　千中　大村　葉山　うる　玉松　上泉　や瑤　東伯　正華　や　紅紅　蓮花　宗苑　千葉　有秋　京橋　澄春

高橋　梅佳　田玉　菊地　高橋　鵜澤　松丸　篠田恵　田中　戸村　鷺山　飯高　長谷川　中尾　伊東　山本　加明　山口　須田　本田　茂木　山口　石川　吉田　宇田川　佑子　春華

泰子　哲子　峰　幸苑　琴舟　愛石　美耶　博衣　美舟　梢生　幹生　谷千　尾恵　東京　本子　瀬真　口日　田夏　木子　口律　田香　美雪　絢水　鈴風　洋子　佑子　宇田川春華

秀作（60音順）

竜泉　たかはし　澄春　京橋　た上泉　耕雲　正宮　華　書游　た硯か　清水　月　高崎　やま　蒼原　颯葵　樹原　高崎　清月　たか　墨花　大雲　附中　若葉　大雲　立精　菊地　書游　椿翠

紅瑤　声香　幸扇　あこかだ　木だ　〃曜

藍澤　渡邊　山本　本吉　宮川　堀江　深澤　春岡　浜野　根岸　土田　鶴井　庄司　庄華　猿渡　佐木　境野　酒井　齋藤　齋田　後藤　近藤　小峰　小美　小林　小口　黒柳　國峰　工藤　草刈　菊地　少寺　大島

白珠　瑛音　梅香　明香　洋子　幸泉　清洗　佳　聡春　永篁　正子　弘枝　雅裕　玲菜　咏艸　篁右　雅芳　和子　淑泉　良子　舞夢　晃江　智代　竹葉　琴翠　山房　眞華　白雅　小野　みよこ　昌子

佳作（60音順）

菊月　光彩　もみ　松村

新井　浅恵　青江　青木　木蓮　木玉　松枝　月

昌宛　竹美　無未　己門　高真　椿翠　竹葉　硯水　白露　如宣　白月　長月　増田　玉山　水海　白珠　澄春　桂泉　上　〃阪　大汀　春阪　た向　東実　書游　竜泉　蕉書

Ａ Ｉ　正華　竹美　蕉書　潮音　大阪　奥田　こだ　幕張　正華　華祥　大阪　伏華　高井　東総　彩　華祥　こだ　水海　椿翠

吉田　横山　山根　山二　山中　安岸　八真　宮嶋　南庭　真タ　松本　松村　泰子　陽子　増田　平子　野山　根か　西と　浪喜　中岸　中子　村子　村シ　冨西　渡田　樋子　高泉　高山　高橋　泉水　関口　鈴木　清水　柴由　櫻田　坂田　齋本　小藤　小林　小島　北村　加藤　加ふ　小藤　小野　榎喜　薄熊　伊田　田藤　板垣　飯十　安風　藤美

翠　蘭　美　清　奈　真　美　子　玉　子　紀　草　玉　秋　枝　ミ　ケ　泰　陽　佳　子　子　と　喜　み　恵　子　恵　萩　子　紀　彩　子　雪　篁　徹　子　龍　宝　睦　枝　心　紀　子　洋　舟　智　美　杏　邑　秀　一　島　純　ふ　み　恵　舟　春　菜　雅　芳　萩　光　子　子　佳　鳳　佳　栄　洋　子　代　子

入選（60音順）

もく月　香老　旭気　土　正華　誠和　澄春　竹原　千葉　正華　山武　春汀　光彩　昌宛　菊美　大阪　京橋　大阪　千葉　大雲　蘭鼎　文筆　う峰　英大　生峰　彩雨　東静　白向　扇子　蘭鼎　琇韻　黎明　大阪　樹原　澄春　も く　梅桃　白琉　高真　澄か　久賀　澄春　陽瀬　誠崎　八岩　街沼　蘭鼎　八街　岩沼　誠和　大阪　游水　もく

鈴木　鈴木　杉田　杉浦　新谷　代内行　渋谷　椎名　佐木　佐々　櫻田　坂巻　齋藤　斎藤　後藤　近藤　小林　河野　高武　小板橋　文さら　木谷　吉村　北瀬　北又　菅田　神野　川崎　加納　金子　金岡奈　葛津　萩希　小川　岡部　大西　大真　梅一　梅山　植久　岩紅　岩祥　岩渕　入陽　谷光　井花　上雲　伊藤　市川　石サ　石チ　石翠　生径　荒正　新子　井裕　藤泉　雪

利子　香子　恭子　祥風　幸子　翠光　瑞華　葉子　愛華　幸子　椎木　和子　龍貞　麗苑　翠香　喜功　松萩　松春　萩江　恵子　玄城　紫蘭　順子　彩雨　春峡　静代　典子　優子　順子　恵美　萩美　恵美　峯　輝瓊　藤　紅雨　祥苑　紅園　岩陽　陽光　悠花　芝雲　英子　甘雨　花　正子　萩雨　裕泉　藤雪

選外108名氏名略

椿翠　正華　明漢　琇韻　蓮紅　書游　清月　もく　松村　調布　春汀　菊月　玉川　幕張　千葉　高崎　生大泉　上大雲　前橋　生大　有土気　長月　千葉　大雲　前橋　上泉　蘭鼎　正華　樹原　洞書　東向　高崎　青蓮　高陵　北原　泉会　一葦　小映　もく　大阪　黎明　上泉　生大　有秋　琇韻　玉川　白露

綿井　鷲沼　吉田　吉千　遊佐　遊紅　大和　森田　茂木　武藤　宮野　宮崎　真満　湊英　妃美　三嶋　松島　松重　松浦　牧野　本多　堀切　別府　藤本　福田　平山　平山　平さ　日高　春山　喰尾　早部　林喜　林雅　早坂　濱田　畠山　根津　沼田　丹羽　仁木　永田　中村　豊嶋　戸部　徳淵　鶴田　積田　塚本　田村　武内　竹内　関根　春華

なお　将太　鶴子　幸恵　紅雅　佐和　由紀　翠芳　藤江　蕉谷　満津　蕉睦　英明　美子　敏子　翠舟　翠景　玉江　清次　和枝　幸雲　信子　喜恵　流源　優子　彩子　彩華　勝真　美子　朗子　梅艸　竹雪　芝香　飛龍　奎心　光子　時堂　一琴　藤勝　風　萩峯　花　智源　美代　慶子